

梅 史 — 中世文学 —

小林 祥次郎

Ume (Plum Blossams) — In the Japanese literature in the Kamakura and Muromati era —

Shojiro KOBAYASHI

中世文学と区切ったが、扱うのは説話・軍記物語である。これに参考として謡曲を加える(ただし「梅」は明和年間の新作なので扱わない)。和歌や物語では、中世の作品であっても、伝統的な感じ方を継承している、さほど新しいものが見られなろうという予想からである。

ところで、これらの文学は和歌や物語のように情緒的なものでないから、梅はあまり出てこない。『古本説話集』『宇治拾遺物語』『閑居友』『保元物語』などには、分量が多くないからでもあらうが、梅という語は見えない。

1 和歌的な扱い

説話文学の場合でも、梅を漢詩や和歌と同じような扱いをした例がないわけではない。

神木の上の宮殿で東西南北に見られる年中行事の景を、次のように描写している。

東ニハ正月ノ朔比ニテ、梅ノ花糸讎ク栄キ、鶯糸花ヤカニ、世ノ中ニ今メカシク、所々ニ節供参リ、世拳テ微妙キ事員不知ズ。(今昔物語集・一九・三三)

ここでは、梅を正月のもの、鶯と取り合わせるものとしている。佳景の描写としては、伝統的に描くよりなかったであろう。

「籬の梅」と熟して用いた例がある。

(一条今出川の辺の義経夫人の家) 荒れたる宿の癖なれば、軒の葱に露置きて、籬の梅も匂ひあり。(義経記・七・判官北国落の事)
おうこれなる籬の梅の花が、弱法師が袖に散りかかるぞとよ。(謡

曲・弱法師。日本名著全集・謡曲大観による。日本古典文学大系本には「籬」が「木陰」になっている。)

籬の梅と熟した例は、

散りはつる籬の梅の鶯は止まる在りかを忍びてぞ鳴く(実家集・一四)

知らぬ間に籬の梅は折りてけり袖懐かしき人をとがめむ(忠盛集・五)

など歌に見えるから、これも情緒的な表現であると言える。

雪を梅に見立てることは中国文学からの知識であり、『万葉集』以来の和歌に多く見られる。

松の雪だに消えやらで、苔の細道かすかなり。嵐にたぐふ折々は、梅花ともまた疑はる(平家物語・九・老馬)

和歌的なものを継承していることになるが、物語などであれば、もっと情緒的に細叙するのに、この程度の描写でしかない。それに、かような例は多くはない。

和歌に関する説話には、情緒的な場面に梅が描かれることがある。

(藤原道信の和歌に) 亦此ノ中将、屏風ノ絵ニ、山野ニ梅ノ花栄タル所ニ、女ノ只一人有ル屋ノ糸幽ナル所ヲ此ナム読ケル ミル人モナキ山ザトノ花ノイロハ中々カゼゾオシムベラナル ト(今昔物語集・二四・三八)

この歌は『道信集』(五五)に「屏風の絵に花咲きたる山里のかすかに、女ただ一人あり。」という詞書で載る。違いはほとんどない。

花山院、御髪下ろさせたまひて後、叡山より下らせたまひけるに、

東坂本の辺に、紅梅のいとおもしろく咲きたりけるを、立ちとどまらせたまひて、しばし御覽ぜられけり。色香をば思ひも入れず梅の花常ならぬ世によそへてぞ見る(古今著聞集・和歌・一四五)歌は『新古今集』(雑下・一四四四)に「梅の花を見たまひて」という詞書で載る。右の説話では、作歌の事情を詳述している。いかにも説話らしい例として、梅と桜とではどちらが優れているかという論争がある。

(藤原頼通と公任と春秋の花はいずれが優れるかと論じ、頼通は桜を春の第一とする。)大納言、「梅の候はむうへは、桜第一にてはいかが候ふべき。」と申されければ、梅と桜の論になりて、自余の花の沙汰は次になりけり。大納言、恐れをなして、強く論じ申されずながら、「なほ春の曙に紅梅の艶色捨てられがたし。」と申されける、優にぞはべりける。(古今著聞集・草木・六五三)

論争が身分によつて決まったのであるが、作者は梅と桜の優劣に関する論争を「優」なこととして記している。これも説話らしい話で、身分の低い者が歌を詠んで賞せられる話がある。

後嵯峨ノ法皇ノ御熊野詣アリケル時、伊勢国ノ夫ノ中ニ、本宮ノヲトナシ河ト云所ニ、梅ノ花ノサカリナルヲ見テ、ヲトナシニサキハジメケム梅ノ花ニホワザリセバイカデシラマシ 夫ガ歌ニハイミジキ秀歌ナルベシ。(沙石集・五末・二)

地下人には珍しい風流として、賞賛しているのである。この説話は、謡曲「巻絹」では、諸国から集めた巻絹を都から熊野に奉る男が遅参したので縛られるが、音無の明神が神子に乗り移つて、

さも美しき冬梅の、色殊なりしを何となく、心も染みてかくばかり、音無にかつ咲きそむる梅の花、匂はざりせばたれか知るべき

と手向けた者であるからと、縛つた縄を解かせるといふ話に脚色されている。

「鶯宿梅」の故事を引用する説話がある。

かの貫之が娘の宿に匂ひことなる紅梅のありけるを、内より召しけるに、鶯の巢を作りたりけるをさながら奉るとて、勅なればいとめかしこし鶯の宿はと問はばいかが答へむ といふ歌を付けたりける思ひ出でられて、かたがたいと優し。(十訓抄・七・一六)

鶯宿梅の故事は、最初は『拾遺集』(雑下・五三二)にあり、歌の作

者は詞書に「家あるじの女」とあるだけであるが、『大鏡』(道長)以下ではそれを貫之の女のこととする。右の説話では、鳥羽院から菊を求められてさし上げた話に、類似する事例として挙げている。『古今集』は歌の聖典であるから、仮名序の内容にかかわる説話が見られる。

「花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。」について、

(花に鳴く鶯というのは、孝元天皇の御時、大和国の高間寺で、愛する弟子が死んで)次の年の春、かの寺の軒端の梅の梢に鳴く鶯の声を聞けば、「初陽毎朝来 不相還本栖」と鳴きける。文字に移せば歌なり。

初春の朝ごとには来たれども会はでぞ帰るもの住みかに と、鶯のまさしく詠みたる歌ぞかし。(曾我物語・五・鶯蛙の歌の事)

梅ではなく鶯にかかわることであるが、ここに触れておく。序の本文は、鶯や蛙の声に触発されてすべての生物は歌を詠むものであるが、中世には右の鶯の詠んだ歌があり(蛙の詠んだ歌もある)、謡曲「白楽天」にも、

そもそも鶯の、歌を詠みたる証歌には、孝謙天皇の御宇とかよ、大和の国、高天の寺に住む人の、式年の春の頃、軒端の梅に鶯の、来たりて鳴く声を聞けば、初陽毎朝来、不遭還本栖と鳴く。文字に写してこれを見れば、三十一文字の詠歌の言葉なりけり。初春のあした毎には来つれども、あはでぞ帰る、もとのすみかにと聞こえつる鶯の声を初めとして、その外鳥類畜類の、人にたぐへて歌を詠む、例は多くありそ海の、浜の真砂の数々に、生きとし生ける物いづれも歌を詠むなり(白楽天)

とある。『古今集』の古注では、鎌倉時代の弘安九年(一二八六)ころ成立の『古今和歌集序聞書三流抄』に「日本紀云」として同じ説話があり、『古今和歌集頼阿序注』にも見える。

仮名序に載る王仁の歌という「難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春迎と咲くやこの花」の「この花」について、山田孝雄『桜史』では桜であると力説しているが、仮名序の古注に、「この花は梅の花を言ふなるべし。」とあり、歌論書にも「この花といへるは梅の花をいふなりといへど」(俊頼髓脳)、「この花とは梅の花なり。…或書云、梅衆木前花発、故号木花云々」(奥義抄)とあるなど、平安中期以後、梅としていた。

謡曲「難波」は「この花」に関することを題材にしたもので、官人が熊野に年籠もりして、初春に都へ帰る途中で難波に立ち寄り、梅の木陰を掃き清める翁に梅の由来を尋ねると、「難波津に」の歌を引いて仁徳天皇の仁政を語り、自分は王仁の霊であると告げ、後段で王仁の姿を現し舞楽を奏する、という筋である。なお「弱法師」にも、「所は難波津の梅ならば、ただこの花と仰せあるべけれ」とある。

次の例は、法会の盛況の描写に用いたものである。

（聖武天皇の東大寺造営供養）諸天蓋ヲ捧テ御津ノ浜松、白雪二傾歟ト驚キ、異香衣ヲ染テ、難波津ノ梅忽ニ春ヲ得タルカト怪シマル。

（太平記・二四・大仏供養事）

代表的な歌人と梅とを取り合わせた話がある。次の例には柿本人麻呂が出てくる。

栗田讃岐守兼房といふ人ありけり。年ごろ和歌を好みけれど、よろしき歌も詠み出ださざりければ、心に常に人丸を念じけるに、ある夜の夢に、西坂本とおぼゆる所に、木はなくて梅の花ばかり雪のごとく散りて、いみじく芳しかりける。心にめでたしと思ふほどに、傍らに年高き人あり。（その肖像を描かせて、宝として礼していたので、歌が上達した。）（十訓抄・四・二）

人麻呂に梅の歌はないのであるが、梅が歌の世界にふさわしい花であると考えたからであろうか。

謡曲「東北」は、和泉式部が東北院に梅を植えたという話を脚色したものである。

この寺いまだ上東門院の御時、和泉式部この梅を植ゑ置き、軒端の梅と名づけつつ、目がれせず眺めたまひしとなり。

とあるように、和泉式部が植えた東北院の軒端の梅の下で僧が法華経を読んでいると、夢に和泉式部が現れ、御堂関白がこの門前で法華経を読み、式部が「門の外法の車の音聞けば我も火宅を出でにけるかな」と詠んだという筋である。

和泉式部の軒端の梅という挿話は、「東北」よりも後の本と思われるが、『応仁記』（群書類従本）にも、

一条ノ道場東北院、是ハ上東門院ヨリ居玉フ寺ナレバ、和泉式部が軒端ノ梅アリ。（三・洛中大焼之事）

とある。『応仁記』が謡曲によったのでないとするれば、そういう伝承が両者に見られることになる。

ところが、和泉式部には軒端と梅とを取り合わせた歌はない。「軒端の梅」と熟して用いた歌は、和泉式部と同時代の、

我が宿の軒端の梅や咲きぬらむ鶯来鳴く声聞こゆなり（長能集・三）

が最古であろうか。これも梅が和歌にふさわしいからであろうか。

歌についての教養のない者を嘲笑する説話がある。

二条三位経盛の家に、梅花めでたく咲きたりけるころ、源三位頼政、御前を通るとて車を止めて、「思ひの外に参りてこそはべれ。」と言ひ入れたりけるを、言ひ継ぎの侍、「源三位殿の申すと候。思はざる外に参りてはべり。」と聞こえければ、心得ず対面して、さるほどにて帰られけり。…この侍、君が来ませるといふ古歌を知らざりけるにや。心得ぬ者はまねびには必ず失錯の出で来るものなり。

（十訓抄・七・三三）

「我が宿の梅の立ち枝や見えつらむ思ひの外に君が来ませる」（拾遺集・春・一五、平兼盛）を踏まえた会話を、侍が理解できなかったのである。

次の例は、風流な心のない者に呆れる話である。

（祭主三位輔仁の家）春の初め、軒近き梅が枝に、鶯の定まりて巳の時ばかり来て鳴きけるを、ありがたく思ひて、（歌人たちを招くと、鶯は来ない。宿直の伊勢武者に聞くと、鶯のやつは来たが、帰りそうなので、射落として止めておいたと言う。）（十訓抄・七・三四）

和歌を踏まえることがなくて情緒的なのは、『今昔物語集』巻第二十二第七話の一例くらいである。藤原高藤が、かつて契りを結んだ女子をふたび訪れると、

二月ノ中ノ十日ノ程ノ事ナレバ、前ナル梅ノ花、所々散テ、鶯木末哀レニ鳴ク遣水ニ散落テ流ル、ヲ見ルニ、極ク哀也。（二二・七）

『富家語』（二三三）に載る話はこれのあらすじで、梅も出てこない。小西甚一「後の雁」（『国文学言語と文芸』昭和三十七年九月）は、この説話が「宇津保物語」（俊蔭）の「兼雅が俊蔭のむすめと契る条によく似ている。」「実在の高藤に『今昔物語集』のような艶事があったかどうかは、保証の限りでない。…しかし、こういった型の「話」は、平安時代の貴族についてよく語られたのではなからうか。」という。そういう話なので、このような情緒的な表現になっているのであろうか。

2 漢詩文的なもの

梅は中国原産であるから、当然中国文学でさまざまに描かれ、その影響が日本で見られることは、別に記した。(群馬県立女子大学国文学研究第一九号・第二〇号、本紀要第三二号所収の小稿)

梅の南枝と北枝では花が開くの遅速があるということがある。

(寿永三年正月に屋島にいる平家) ただ平家の人々は、いつも氷に閉ぢ込められたる心地して、東岸西岸の柳遅速をまじへ、南枝北枝の梅開落已に異にして……さまざま興ありしことも、思ひ出で語り続けて、永日を暮らしかねたまふぞ哀なる(平家物語・九・生ずきの沙汰)

「南枝北枝」という熟語は、謡曲には、

東岸西岸の柳の、髪は長く乱るるとも、南枝北枝の梅の花、開くる法の一筋に、渡らんための橋なれば(東岸居士)

という例がある。これは、直接には慶滋保胤の「東岸西岸の柳 遅速同じからず 南枝北枝の梅 開落已に異なり」「東岸西岸の柳 遅速不同 南枝北枝の梅 開落已異」(和漢朗詠集・一一)に基づき、そのもとなつたのは、「大庾嶺上の梅、南枝落ち、北枝開く、寒暖の候異なり」「大庾嶺上梅、南枝落、北枝開、寒暖之候異也」(白孔六帖・九九)である。

右の『白孔六帖』にある「大庾嶺」は中国の梅の名所で、『和漢朗詠集』には三例見えるなど、平安漢詩文の世界では有名であったが、仮名文には見当たらないようである。大庾嶺は他にも、

第六に、愛別離苦と申すは、別れを惜しむを申しはべるなり。これも浅きより深く申すべきなり。太庾嶺の梅、霞にかをり、金谷園の桜、風にはふ春も暮れぬれば、別れを惜しむ人多く侍るなり。(宝物集・三)

但人界ノ生ハ、一ビ別テ後、再ビ不会。大庾嶺ノ梅メ霞ミニ萎ミ、金谷園ノ桜ノ風ニ散リ、ヲバステ山ノアケボノ、アカシノ浦ノ上ダニモ、余波ハ惜シキ物ゾカシ。(延慶本平家物語・二一本)

貴妃ノ御衣ヲヌギ給ヘル貌ヲ御覽スルニ、白ク妙ナル御ハダヘニ、蘭香ノ御湯ヲ引カセケレバ、藍田日暖玉低涙 庾嶺雪融梅吐香カトアヤシマル、程也。(太平記・三七・楊国忠事)

など用いた例がある。

なお謡曲に、

それ草木心なしとは申せども花実の知己をたがへず、陽春の徳を具へて南枝始めて開く。(高砂)

誰かいひし春の色は東より来るといへども、南枝花始めて開く。(難波)

とあるのは、「誰か謂ひし春の色の東より到ると 露暖かにして南枝に花始めて開く」「誰謂春色從東到 露暖南枝花始開」(和漢朗詠集・梅・九二、菅原文時)による。この南枝も、右の『白孔六帖』に基づく。

梅の異名を好文木ということがある。

唐国の帝、文を好みたまひければ開け、学問怠りたまへば散りしほみける梅はありけれ。好文木とぞ言ひける。(十訓抄・六・二二) 唐の帝の御時は、国に文学盛んなれば、花の色を増し、匂ひ常より勝りたり、文学廢れば匂ひもなく、その色も深からず、さてこそ文を好む木なりとて、梅をば好文木とは付けられたり。(謡曲「老松」) などは、その由来を語るものである。唐国の帝というのは、晋の哀帝のことで、このことは『晉起居注』(佚書)にあるという(『大漢和辞典』所引「謡古抄」「東見記」)。

梅は他の花に先駆けて咲くので、黄山谷の詩の「山礬は是れ弟梅は是れ兄」「山礬是弟梅是兄」によって「花の兄」という異名があり、謡曲「難波」などに見える(前号の小稿参照)。

曾我太郎も、幼き時よりとり育てて、わりなき事なれば、実子にも劣らず、心ざままたさかしかりしかば、梅兄竹弟の思ひをなし、朝夕おろかならざりしかども、所領広からざれば、一所を分くる事なし。(曾我物語・一〇・曾我にて追善の事)

という例は、竹を弟とするのが珍しい。出典の黄山谷の詩では山礬(沈丁花の類)であり、和歌などでは、他の花に遅れて咲く菊をいうことが多い。

「梅酸の渴」という語句が『太平記』に二例ある。

將軍モ且ク松尾・葉室ノ間ニ引ヘテ、梅酸ノ渴ヲゾ休メラレケル。(太平記・一五・建武二年正月十六日合戦事)

城中已ニ食乏シテ兵皆疲ル。然トイヘ共、北国ノ上洛近ニアルベシト聞テ、士卒梅酸ノ渴ヲ忍ブ者也。(太平記・二〇・宸筆勅書被下於義貞事)

これは『世説新語』(仮譌)(『大漢和辞典』所引)に見える魏の武帝

(曹操)の次の故事による。

魏武嘗て行役し、軍士と汲道を失ふ。軍皆渴す。乃ち令して曰はく、「前に大梅林有り、子饒く甘酸なり。以て渴を解くべし。」と。士卒之を聞き、口皆水を出だす「魏武嘗行役、与軍士失汲道、軍皆渴、乃令曰、前有大梅林、饒子甘酸、可以解渴、士卒聞之、口皆出水」

3 比喩

梅の花を比喩に用いることがいくつか見える。

(撰津妙法寺の楽西上人)この庵の前に、小さき池あり。蓮多くて、花の盛りに水も見えず、ひとへに紅梅の絹をおほへるがごとし。

(発心集・二・七)

ここでは蓮の花盛りを紅梅に譬えている。

『太平記』には、美女を梅に譬えた例がいくつか見える。塩屋高貞の妻の美貌を語る部分では、

色々様々ノ花共ヲ取テニ譬ラレシニ、梅ハ匂ヒフカクテ枝タヤカナラズ、梅ガ香ヲ桜ガ色ニ移シテ、柳ノ枝ニサカセタランコソ、ゲニモ此貌ニハ譬ヘメトテ(太平記・二一・塩屋判官讒死事)

とし、高師直が塩屋高貞の妻の浴室を覗く場面では、

只今此女房湯ヨリ上リケリト覺テ、紅梅ノ色コトナルニ、水ノ如クナル練貫ノ小袖ノシホトアルヲカイ取テ(太平記・二一・塩屋判官讒死事)

とする。前者は「梅が香を桜の花に匂はせて柳が枝に咲かせてしがな」

(後拾遺集・春下・八二、中原致時)を踏まえるか。

楊貴妃も梅に譬える。

尋常ノ寒梅樹折テ軍持ニ上レバ、一段ノ清香人ノ心ヲ感ゼシム。(太平記・三七・楊国忠事)

貴妃ノ御衣ヲヌギ給ヘル貌ヲ御覽ズルニ、白ク妙ナル御ハダヘニ、蘭香ノ御湯ヲ引カセケレバ、藍田日暖玉低涙 庚嶺雪融梅吐香カトアヤシマル、程也。(太平記・三七・楊国忠事。この例、前出)

『曾我物語』には、相撲を取る若者たちの描写に梅を用いている。

いづれも相撲は上手なれば、おのおのさし寄りて、つまどりしたる有り様は、春待ち兼ねて咲く梅の、雪を含めるごとくなり。(曾我物語・一・おなじく相撲の事)

若々しさの譬えなのであろうか。

源平両家を梅に譬えた例が謡曲「烏帽子折」にある。

源平両家の繁昌、花ならば梅と桜木、四季ならば春秋月雪の眺めいづれぞと争ひしにや。

これは華やかさの譬えであろう。

4 挿す

武士が梅の花を甲冑など挿すということがいくつか見える。その中で有名なのは、梶原景季が簾に挿した話で、『平家物語』の異本群に、少しずつ異なるかたちで見える。(これについては須藤真紀氏の協力を得た。浅原美子氏にこれに関する論があるとのことであるが未見。)

『源平盛衰記』では、

梶原は心の剛も人にすぐれ、数奇たる道も優なりけり。咲き乱れたる梅が枝を胡簾に副へてぞさしたりける。かかれは花は散りけれども、匂ひは袖にぞ残るらん。吹く風をなにとひけん梅の花散り来る時ぞ香はまさりける。といふ古き言までも思ひ出でければ、

平家の公達は、「花簾とて優なり、やさし」と口々に感じたまひける。(源平盛衰記・三七・景時秀句の事)

梶原とだけであり、段名や続く挿話からすると、むしろ景季の父である景時のように見える。歌は『拾遺集』(春・三〇、凡河内躬恒)に見える。梅でなければならぬところである。

長門本には、

梶原源太、やさしき事は、片をかなる梅の、またさかりなるを一枝折て、ゑびらにさしぐして、敵の中へかけ入て、戦時もひく時も、梅は風にふかれてさとりければ、かたきも御方も、これをみてかんじける処に、城内よりよはひ三十ばかりなるおとこの、三本三位中将殿御使にて候。「梅かざ、せ給て候に、申せ。」と候。

こちなくも見ゆる物かなさくらがり と申もはてぬに、源太、馬より飛下て、「しばし御返事申候はん」とて、いけどりたらんためとおもえ、とぞ申たりける。(長門本平家物語・一六)

応酬の連歌からすると、梅では合わないことになる。延慶本や四部合戦本では梅ではなく桜になっている。

梶原源太景季、ヤサシキ事ハ、片岡ノ桜ノイマダ青葉ナルヲ一枝折テ、エビラニ差具テシバシ戦ヲ引ケレバ、桜ガ風ニフカレテサトチリニケリ。敵モ御方モ是ヲ感ジケル所ニ、城中ヨリ齡三十許ナル

男ノ、…「本三位中将殿ノ御使ニテ候。桜カザ、セ給テ候ニ、申セ
トテ候。コチナクモミユルモノカハサクラガリ ト申ハテネバ、
源太馬ヨリ飛下テ、「暫ク御返事申候ワム」トテ、イケドリト
ラムタメトラモヘバ トゾ申タリケル。（延慶本平家物語・五本）
尔ても此の源太と申す者は、同じき東武士とは云乍ら、内に情け有
りて、外に色有る男子なり。合戦の庭を好みけり。而ても、斯る事
は二月上旬の比なり。初枝を一枝手折りて、簾に差して戦ひければ、
懸くる時も颯と散り、復引く時も颯と散る。甲の鉢、鎧の左右の袖
に散ち登りければ、情け有るも情け無きも、皆人、目を付けてぞ見
る。（四部合戦状本平家物語・九・二度の懸）

後者ではこの後にあるべき歌または連歌が欠けているが、右の二本を
参照すれば、桜を詠んでいることになろう。そういう次第で、むしろ桜
であるべきなのかもしれないが、以後は梅として、謡曲「簾」にも脚色
されて、その由来を次のように語る。

そもそもこの生田の森は、平家十万余騎の大手なりしに、源氏の方
に梶原平三景時、同じき源太景季、色ことなる梅花のありしを、一
枝折つて簾にさす。この花すなはち笠印となりて、気色あらはにい
ちじるく、高名人にすぐれしかば、景季かへつてこの花を礼し、す
なはち八幡の神木と敬せしよりこのかた、名将の古跡の花なればと
て、簾の梅とは申すなり。

後シテの景季が白梅を肩に挿して、

不思議やな、その様いまだ若武者の、胡籙に梅花の枝をさし、さ
も華やかに見えたまふは、いかなる人にてましますぞ。

と問われる姿で登場するのは、佐成謙太郎『謡曲大観』に「この花やか
な扮装が、謡曲作者を喜ばせたのに外なからうと思ふ」と言うように、
舞台の上を華やかにする好ましい題材であつたのであらう。

『太平記』には、その子孫が同じことをしたことが見える。

（討ち死にした梶原弾正忠）後二、「アハレ剛ノ者や、誰ト云者ヤ
ラン。名字ヲ知バヤ。」トテ是ヲ見ルニ、梅花ヲ一枝折テ簾ノ上ニ
著タリ。サテハ元暦ノ古、一谷ノ合戦ニ、二度ノ懸シテ名ヲ揚シ梶
原平三景時ガ、ソノ末ニテゾ有ラント、名ノラデ名ヲゾ被知ケル。
（太平記・二九・小清水合戦事）

梅を挿すという例は他にもある。

中二モ道場坊助注記祐寛ハ、児十人同宿三十余人、紅下濃ノ鎧ヲ一

様ニ著テ、児ハ紅梅ノ作り花ヲ一枝ヅ、甲ノ真額ニ挿タリケルガ、
（太平記・一四・箱根竹下合戦事）

三陣ニハ花一揆、命鶴ヲ大将トシテ六千余騎、萌黄・火威・紫糸・
卯ノ花ノ妻取タル鎧ニ薄紅ノ笠符ヲツケ、梅花一枝折テ甲ノ真甲ニ
差タレバ、四方ノ嵐ノ吹度ニ鎧ノ袖や匂フラン。（太平記・三一・
武蔵野合戦事）

和歌で梅を「さす」と詠んでいるのは、

もしきの梅の花笠さす時は天の下こそうしろやすけれ（公忠集・
四）

青柳の片糸に縊りて出でれどさしてぞ来つる梅の花笠（公任集・
三三三）

のように、梅の花笠をさすとか、

白髪にさしまどはせる花の色をそれなむ梅と人は分かなむ（家持集・
四九）

のように髪にさすとか、

梅の花折りてかざしにさしつれば衣に落つる雪かとぞ見る（千載集・
春上・二一、藤原公能）

梅が枝を折りてかざしにさしつれば袂も濡れぬ雪ぞ降りける（忠盛
集・六）

のように、挿頭にさすとかである。なお挿頭は、『万葉集』に、

もしきの大宮人は暇あれや梅をかざしてここに集へる（万葉集・
九・一八八三）

とあり、古くからのことである。

次の例は歌としては珍しい。

物へまかる道に、童の腰にさしたる花を惜しみしかば、人して言は
せし 梅の花見返るほどに散るものを腰になさしそ惜しむとなら
ば（行尊大僧正集・一七三）

腰に挿すという特異な例であるが、特異であるからこの戯れの歌が詠
まれることになるのであらう。

説話にも、

ある者所の前を、春のころ、修行者の不思議なるが通りけるが、檜
笠に梅の花を一枝挿したりけるを、児ども法師など、あまたありけ
るが、よにをかしげに思ひて、ある児の、「梅の花笠着たる御坊」
と言ひて笑ひたりければ、この修行者、立ち帰りて、袖をかき合は

せて、ゑみゑみと笑ひて、身の憂さの隠れざりけるものゆゑに梅の花笠着たる御坊と仰せられ候ふやらむ。」と言ひたりければ、この者ども、「こはいかに。」と、思はずに思ひて、言ひやりけるたもなくぞありける。さうなく人を笑ふこと、あるべくもなきことなや。(今物語・一六)

のように、花笠をさすことがあるが、歌のように情緒的ではなく、それにふさわしくない人物がそれをしてるのを嘲笑するという話である。

古典にある「挿す」を踏まえた例もある。

梅花を折つて首にはさめども、二月の雪衣に落つ。(平治物語・下・常葉落ちらるる事。この文は金刀比羅本系のみにあるものか。古活字本・新古典大系本にはない。)

松根ニ依テ腰ヲスラネドモ、千年ノ翠リ手ニミテリ。梅花ヲ折テ頭ニサ、ネドモ、二月ノ雪衣ニ落、月モ高嶺ニ隠ヌレバ、山深シテ道ミヘズ。(延慶本平家物語・五本)

謡曲にも

松根に倚つて腰を摩れば、千年の緑手に満てり。梅花を折つて頭に挿せば、二月の雪衣に落つ(高砂)

今は春も半ばぞかし、梅花を折つて頭に挿しはさまざれども、二月の雪は衣に落つ、あら面白の匂ひやな。(弱法師)

などである。これらは、

松根に倚つて腰を摩れば、千年の翠手に満てり。梅花を折つて頭に挿めば、二月の雪衣に落つ(和漢朗詠集・三〇、尊敬〈橋在樹〉)

によるものである。

梅を挿すことは和歌などに見えるところである。武士たちのダンディズムで、それに倣つて鎧に挿しのであらう。

5 実

食用や薬用になる梅の実に関する説話は存外少ない。その中では、次の話は広く知られていたのであらうか、いくつかの本に見える。

(永観の伝に、薬王寺で) 禅庭に梅の樹有り。其の実を結ぶ毎に、必ず彼の施に充つ。故に村里の児童、呼びて悲田の梅と為す。「禅庭有梅樹。毎結其实、必充彼施。故村里児童、呼為悲田梅」(拾遺往生伝・下・二六)

この禅林寺に梅の木あり。実なるころになりぬれば、これをあだに

散らさず、年ごとに取つて、薬王寺といふ所に多かる病人に、日々といふばかりに施させられければ、あたりの人、この木を悲田梅とぞ名付けたりける。今も事のほかに古木となりて、花もわづかに咲き、木立もかしげつつ、昔の形見に残りてはべるとぞ。(発心集・二・二・禅林寺永観律師事)

『私聚百因縁集』(八)の「四 永観事」にも見えるが、右の『発心集』によつたもののようである。

塩梅という熟語も実に関することであるから、ここに上げておく。

(行基が魚肉以外は食することのできない病人のために) 上人みづから塩梅を和して、その魚味を試みて、味はひ調ふる時、進めたまふに、病者これを服す。(古今著聞集・釈教・三七)

2に記した梅酸の渴も、実に関することと言えるか。

6 仏教

仏教説話で、梅に対する執心から往生できなかった話がある。

(西の京に住む人の女子) 只、紅梅二心ヲ染テ、此レヲ翫ビケリ。東ノ台ノ前へ近ク紅梅ヲ殖ヘテ、花ノ時ニハ、早旦ニ簾子ヲ上ゲテ、只独リ此レヲ見ツ、他ノ心无ク此レヲ愛シケリ。夜ニ至ルマデ媚キ匂ヲ目出デ、内ニ入ル事ヲセズ。木ノ辺ニハ草ヲモ不生サズ、鳥ヲモ不居ズシテ、花散ル時ニ成ヌレバ、木ノ下ニ疊ヲ敷テ、花ヲ外ニ不散ズシテ取り集メテ置ク。切ナル思ヒニハ、花枯ヌレバ取集テ薫ニ交ゼテ匂ヲ取レリ。其ノ中ニモ、小キ木ヲ殖テ、此レガ花栄タルヲ見テ、他ノ事无ク興ジケリ。(この娘が死ぬと、木の下に蛇が出る。) 明ル年ノ春、此ノ木ノ下ニ去年ノ蛇出来ヌ。木ヲ纏テ不去シテ、花栄テ散ル時ニ、蛇、口ヲ以テ花ヲ食ヒ集テ一所ニ置ケルヲ、父母見テ(娘が蛇になつたことを知り、智者たちを呼んで法華八講を行うと、蛇は木の下で聞いている。五巻の日、竜女が成仏する由を説くと、蛇は木の下で死ぬ。父の夢に女子が成仏したことを見る。)(今昔・一三・四三)

『今昔物語集』のこの話の前には、六波羅密寺の講仙という僧が、橘を愛した執着心から蛇になつてその木の下に住したが、法華経の功德によつて極楽に往生したという話が載っている。この説話は『大日本国往生法華験記』(上・三七、僧の名は「康仙」)、『拾遺往生伝』(中・二)、『発心集』(一・八、僧の名は「幸仙」)にも見える。『発心集』の同じ

段には、大江佐国が、花を愛して蝶に生まれ変わった話もある。法華經の功德を説く説話であるが、風雅な心情が執着になつて往生の妨げになるとしている。

『発心集』のこの話の前に、次の話がある。

横川に尊勝の陽範阿闍梨といひける人、めでたき紅梅を植ゑて又無きものにして、花盛りにほとへにこれを興じつつ、おのづから人の折るをも、ことに惜しみさいなみける程に、いかが思ひけむ、弟子なども外へ行きて人もなかりけるひまに、心もなき小法師のひとりありけるを呼びて「斧きやある。持て来。」と言ひて、この梅の木を土際より切りて、上に砂いさうち散らし跡形なくてゐたり。弟子帰りに怪しみて故を問ひければ、ただ「由なければ。」とぞ答へける。

これらは皆、執をとどむることを恐れけるなり。（発心集・一・七）
優れた僧がそういう執着心を断ち切るというものである。

湛空上人、嵯峨の二尊院にて涅槃会を行はれる時、人々五十二種の供物を供へけるに、花を家に立てて歌を詠みて付けけるに、西音法師、水瓶に梅を立てて送るとて詠みける 如月の中の五日の夜半の月入りにし跡の闇ぞ悲しき（古今著聞集・釈教・七一）

歌は『新後撰集』に、

二月十五日の夜、湛空上人に申しつかはしける 如月の半ばの空の夜半の月入りにし跡の闇ぞ悲しき（釈教・六三五、西音法師）とあり、梅のことは見えない。

仏に梅を供えるというのは、歌にも、

梅の花飽かぬ匂ひも惜しからず仏のために折るにしなければ（拾玉集・三〇七）

梅の花手折りて瓶にさす春はありかやさしき墨染の袖（拾玉集・八〇五）

梅の花三世の仏のためにとて折りつる袖ぞ人などがめそ（新拾遺集・釈教・一四八七、後宇多院）

春ごとに年経る寺の軒の梅折らで仏の手向けとぞなる（安撰集・雜上・一五五、愛王まろ）

などあり、必ずしも珍しくないのかもしれない。因みに、これらの多くは、

折りつればたぶさに汚る立てながら三世の仏に花奉る（後撰集・春

下・一二三、僧正遍昭）を踏まえるのであろう。

『正法眼蔵』には「梅花」と題する巻がある。道元の宋での師天童如浄の語を解説して、「外にあるものと思つてゐた梅花が、自己の正体、正法眼蔵涅槃妙心と別のものではないことを示す。」（水野弥穂子、岩波文庫本注）を説いている。道元の独特な思考が見られる。

仏の教えとはあまりかかわらないが、出家前の幼児が超能力を示すために梅の枝を折る話がある。

（浄蔵の伝に）齡七歳に及びて、俗境に留まらず、好みて仏庭に赴く。父の卿屢ば拘留すといへども、敢へて止まらず。父の卿、児に命じて云はく、「汝誠に三宝に仕へ奉らむと欲はば、我が為に一の験を見せしめよ」といふ。児云はく、「実に父の教への如し。靈験を顕すべし云々」といふ。時に正月なり。庭前に梅の樹有り。其の花新たに開敷せり。児護法をして其の枝を折り落とさしむ。父の卿感傷して泣きて言はず。「齡及七歳、不留俗境、好赴仏庭。父卿屢雖拘留取不止。父卿命児云、汝誠欲奉仕三宝、為我令見一験。児云、実如父教。可顕靈験云々。于時正月也。庭前有梅樹。其花新開敷。児令護法折落其枝。父卿感傷泣而不言。」（拾遺往生伝・中・一）

『扶桑略記』（二二）寛平九年春の条にも同旨の文があり、そこにも「時に正月、児童秘かに護法を折り、梅華を折らしむ、感涙潸然として、修行を制せず」「于時正月、児童秘祈護法、令折梅華、感涙潸然、不制修行」とあり、『日本高僧伝要文抄』（二）にも同旨の記事が見える。広く知られた話であつたのであろう。靈験を示すために枝を折るのであるが、それが梅でなければならぬわけではない。正月のことだからだろうか。

梅の木の下で礼拝するという例がある。

（左近少将藤原義孝が）世尊寺ノ東ノ門ヨリ入テ、東ノ台ノ前ニ紅梅ノ木ノ有ル下ニ立テ、西ニ向テ、「南无西方極樂阿弥陀仏命終決定往生極樂」ト礼拝シテナム板敷ニ上ケル。（今昔物語集・一五・四二）

この話は『大鏡』にも見える。

なほ見れば、東の対のつまなる紅梅のいみじく盛りに咲きたる下に立たせたまひて、「滅罪生善、往生極樂」といふ額を西に向きてあまたたびつかせたまひけり。（大鏡・伊尹）

これも梅でなければならぬことはないはずで、この説話の典拠と見られる『法華験記』(下・一〇三)には梅は見えない。

7 菅原道真

菅原道真は、十一歳の時に梅花の詩を作り、その邸宅は紅梅殿と呼ばれ、太宰府に流される時には「東風吹かば」の歌を詠むなど、梅にまつわる挿話が多い。それがさまざまに述べられている。『太平記』(これは『北野天神縁起』に拠ったものである)にまとまって出ているので、それをまず引用する。

抑天満天神ト申ハ、風月ノ本主、文道ノ大祖タリ。天ニ御坐テハ日月ニ顕光照国土、地ニ降下テハ塩梅ノ臣ト成テ群生ヲ利シ玉フ。：(十一歳の時に)月耀如晴雪 梅花似照星 可憐金鏡転 庭上玉芳馨 ト寒夜ノ即事ヲ、言バ明ニ五言ノ絶句ニゾ作セ玉ケル。：(昌泰四年正月に太宰権帥に遷され)年久ク住馴給シ紅梅殿ヲ立出サセ玉ヘバ、明方ノ月幽ナルニ、ヨリ忘タル梅ガ香ノ御袖ニ余リタルモ、今ハ是ヤ古郷ノ春ノ形見ト思食ニ、御涙サヘ留ラネバ、東風吹バ句ヲコセヨ梅ノ花主ナシト春ナ忘レソ ト打詠給テ、今夜淀ノ渡マデト、追立ノ官人共ニ道ヲ被急、御車ニゾ被召ケル。心ナキ草木マデモ馴シ別ヲ悲ケルニヤ、東風吹風ノ便ヲ得テ、此梅飛去テ配所ノ庭ニゾ生タリケル。サレバ夢ノ告有テ、折人ツラシト惜マレシ宰府ノ飛梅是也。(太平記・二二・聖廟事)

ここには、

1 十三歳の時の詩作

2 紅梅殿

3 「東風吹かば」の歌

4 飛梅とその後日談

のことが語られている。この順序で見てゆくと、1のことは今回扱った範囲では、他書に見えない。

2の紅梅殿は、『枕草子』(二二)に「家は…紅梅」とあるのが道真邸であるなら、それが文献初出である。『平家物語』(一・内裏炎上)には、安元三年四月二十八日の京都の大火で「北野の天神の紅梅殿」が焼失したことが語られている。

3の「東風吹かば」の歌は、『拾遺集』(雑春・一〇〇六)に「流されはべりける時、家の梅の花を見はべりて」という詞書で載り、『大鏡』

(時平)に、流罪のことに続けて、「御前の梅の花を御覧じて」詠んだことが記してある。

『宝物集』(二二)には、流罪のことを記した後に、「古郷の花を詠みたまひける」として歌がある。この詞書からは、太宰府で詠んだようにも解せる。次の例では筑紫で詠んだことにしている。

サテモ筑紫ニ下着給テ：古里ノ南庭ノ梅ヲ思食出テ、東風吹バ句ヲコセヨ梅ノ花アルジナシト春ナワスレソ(延慶本平家物語・四)

4の飛梅の伝説は、「東風吹かば」の歌がもとになって生まれる。

菅家、太宰府におぼしめしたちけるころ、東風吹かば句ひおこせよ梅の花あるじなして春な忘れそ と詠みおきたまひて、都を出でて筑紫に移りたまひて後、かの紅梅殿の梅の片枝飛び参りて、生ひつきにけり。ある時、かの梅に向かひたまひて、故郷の花のもの言ふ世なりせばいかに昔のことを問はまし とながめさせたまひたりければ、かの木、先久於故宅 麋籬於久年 麋鹿於住所 無主又有花 かく申したりけるこそ、あさましともあはれとも、心も言葉も及ばね。(古今著聞集・草木・六七二)

『十訓抄』(六・二二)にもほぼ同旨の話が載り、その後に前に引いた好文本の説明が加えてある。

これらでは「梅の片枝」が飛んで根付いたとするが、『延慶本平家物語』(四)では、

古里ノ南庭ノ梅ヲ思食出テ、東風吹バ句ヲコセヨ梅ノ花アルジナシト春ナワスレソ 依之、梅坪之梅揺動シテ抜テ、安楽寺ニ飛来ル。不思議ナリシ事也。此梅御廟ノ前ニ有于今。(一部前出)

と、梅は根から抜けて飛んだとしている。(安楽寺は道真を葬った、太宰府天満宮と一体の寺)

飛梅伝説の成立については、真壁俊信「飛梅伝承の発生」(『天神信仰史の研究』所収)に論がある。『金葉集』の源経信の、

昔、道方卿に具して筑紫に罷りて安楽寺に参りて見はべりける梅の、我が任に参りて見ければ、木の姿は同じさまにて花の老い木にて所々咲きたるを見て詠める 神垣に昔我が見し梅の花ともに老い木となりけるかな(金葉集・雑上・五五一)

の詞書から、経信の父の道方は、六十二歳の長元二年(一〇二九)正月に太宰権帥を兼ね、長元六年十月に辞して、経信は長元二年には十

三歳であり、少年時に安楽寺の梅を見たことを述懐しているのは、「道真にまつわる梅の伝承が発生していたので、経信が、特別に注目した、と見るのが自然ではなからうか、と考える。…道真が薨じて約百二十年以上も経ているのであるから、その伝承はすでに存在し流布していた、と見ても良いのではなからうか。」とし、その伝承の発生の原因は、『菅家後草』の「読家書」に、道真が京を離れてからの菅原家の邸内の西門にあった樹木が、取り去られ移し植えられてしまったことが記され、『後撰集』に「菅原や伏見の里は荒れしより通ひし人の跡も絶えけり」(恋六・一〇二五、詠み人知らず)という菅原氏の邸宅が荒廃したことが見えるので、「もしも、梅の木も植え変えられたなら、道真に思いを寄せる人びとは、道真が愛した梅木が、主人の後を追って太宰府へ飛んで行ってしまった、と空想しても不思議ではなからう。」とし、さらに、貞元二年(九七七)に安楽寺別当になった道真の外孫の松寿を飛梅の伝承の発生に結び付けてもよいのではないか、と推定している。確定できる証拠ではないようであるが、専門家の説であり、従っておきたい。

飛梅については後日談がある。『新古今集』に、

情けなく折る人つらし我が宿の主忘れぬ梅の立ち枝を 建久二年の春のころ、筑紫へまかりける者の、安楽寺の梅を折りてはべりける夜の夢に見えけるとなむ(新古今集・神祇・一八五三)

という歌がある。不思議な話であるから説話文学にも出ている。

安楽寺ノ飛梅ヲ、或武士、子細モ不知シテ枝ヲリタリケル其夜ノ夢ニ、ケダカゲナル上臈ノ、彼殿ノ挺ニテ詠ジ給ケリ 情ナクラル人ツラシ我ガヤドノアルジワスレヌ梅ノタチエヲ(沙石集・五)

ここでは「ケダカゲナル上臈」が夢に現れて歌を詠む。

『延慶本平家物語』では、

サレバ今ノ平家滅給テ後、文治之比、伊登藤内、補鎮西九国之地頭ニ下リタリケルニ、其郎従ノ中ニ、一人下郎、無法ニ安楽寺ヘ乱レ入テ、御廟ノ梅切テ、宿所ヘ持行テ薪トス。其男即長死去シヌ。藤内驚テ、御廟ニ詣テヲコタリヲ申。通夜シタリケルニ、御殿ノ内ニケ高キ御音ニテ、情ナク切人ツラシ春クレバ主ジワスレヌヤドノムメガヘ 不思議ナリシ御事也。(四)

安楽寺に乱入して御廟の梅を薪にした男は神罰で即死したことになっている。そこまで説話が変化したのである。

天満宮は奇瑞を示す神となっていた。

(隠岐に流された後醍醐天皇の寵妃である民部卿三位)北野ノ社僧ノ坊ニ御坐シテ、一七日参籠ノ御志アル由ヲ被仰ケレバ、…只一夜松ノ嵐ニ御夢ヲ被覚、主忘レヌ梅ガ香ニ、昔ノ春ヲ思召出スニモ、昌泰ノ年ノ末ニ荒人神ト成セ玉ヒシ、心ヅクシノ御旅宿マデモ、今ハ君ノ御恩ニ擬ヘ、又ハ御身ノ歎ニ被思召知タル、哀ノ色ノ数々ニ、御念誦ヲ暫被止テ、御涙ノ内ニカクバカリ、忘スハ神モ哀ト思シレ心ヅクシノ古ヘノ旅ト遊シテ、少シ御目睡有ケル其夜ノ御夢ニ、衣冠正シクシタル老翁ノ、年八十有余ナルガ、左ノ手ニ梅ノ花ヲ一枝持、右ノ手ニ鳩ノ杖ヲツキ、最苦シゲナル体ニテ、御局ノ臥給タル枕ノ辺ニ立給ヘリ。…此老翁世ニ哀ナル気色ニテ、云ヒ出セル詞ハ無テ、持タル梅花ヲ御前ニ指置テ立帰ケリ。不思議ヤト思召テ御覧ズレバ、一首ノ歌ヲ短冊ニカケリ。廻リキテ遂ニスムベキ月影ノシバシ陰ヲ何歎クラン 御夢覚テ歌ノ心ヲ案ジ給ニ、君遂ニ還幸成テ雲ノ上ニ住マセ可給瑞夢也ト、憑敷思召ケリ。誠ニ彼聖廟ト申奉ルハ、大慈大悲ノ本地、天満天神ノ垂迹ニテ渡ラセ給ヘバ、一度歩ヲ運ブ人、二世ノ悉地ヲ成就シ、僅ニ御名ヲ唱ル輩、万事ノ所願ヲ満足ス。(太平記・六・民部卿三位局御夢想事)

北野天満宮は「大慈大悲ノ本地、天満天神ノ垂迹」であり、後に後醍醐天皇が京都へ戻られたのも、その霊験であるというのである。

〔受理年月日 二〇〇〇年九月二十七日〕